

# 近代日本の縁起解釈論争にみる人間観 — 説一切有部の三世両重縁起説をめぐって —

一色 大悟

大正時代の末年から昭和の初期にかけて、日本の仏教学界では原始仏教の縁起説について解釈論争が起こった。論争の発端は、当時イギリス留学中であった木村泰賢が『原始仏教思想論』（大正11年4月）で示した縁起説解釈であった。木村の解釈に首肯しなかった宇井伯寿は、早くも同年7、8月に氏の原始仏教理解の骨子となる「原始仏教資料論」を発表するとともに、自身の縁起説解釈についても大略を示した。さらに大正14年1月には「十二因縁の解釈 — 縁起説の意義」を発表し、木村説批判の論陣を張った。同年同月、赤沼智善も「十二因縁の伝統的解釈に就いて」によってアビダルマで採用されていた伝統的解釈を用いて木村説に反論し、大正15年（昭和元年）には和辻哲郎も「原始仏教の縁起説」で木村説批判の列に加わった。翌昭和2年、これらの批判に対し木村は、『宗教研究』誌上で赤沼・宇井・和辻三者の解釈に批評を加えたが、これに対し和辻は同年『思想』に応答文を掲載するとともに、前年に発表した諸論文をまとめ『原始仏教の実践哲学』を出版した。こののち木村が急逝（昭和5年）したため論争は未決着に終わることになったものの、赤沼、宇井両氏はそれぞれの著作中で原始仏教の縁起説解釈について自説を発表し続けた。

以上の論争は、「縁起説論争」として日本の仏教学界で記憶されることとなった。そしてそれは単なる過去の研究として風化することなく、現代に至るも諸学者によって議論が継続されている。そのため日本の仏教学界において、木村ら四氏の著作はもっぱら文献学的な原始仏教研究の先駆としてのみ扱われ、今西、末木らによる研究を除けば、今なおそれ自身が研究対象とは見なされていない。

しかし木村ら自身の発言を参照すれば、縁起説論争は、仏陀あるいは初期經典の縁起説を単に文献学的客観的に研究する途上で起こった確執という表現には収まらない、別の側面を持っていたことがわかる。たとえば、木村は『原始仏教思想論』序文で自著を「新しい形式における一種の阿毘達磨論書」であって、經典の意味を紙面に現れない「裏面的意義まで推しつめようとしたもの」と表現した。加えて木村は、同書執筆の動機の一つが「混濁せる大乘宗教を洗淨するの標準を確かむる」ために「原始仏教主義」を提唱することであった、と『中央公論』誌上で述べている。また論理的、文献学的としばしば評される宇井でさえも、原始仏教に関しては、和辻の言を借りればブッダの根本思想を「氏の追体験によって推測」（『原始仏教の実践哲学』p.33）しており、宇井本人の弁によれば「主観的の想定」（『印度哲学研究（第三）』p.2）をもって論述していた。つまり縁起説論争は、客観的文献学的な解釈論争であるだけでなく、仏教学草創期の碩学たちが当時の仏教界の問題を背景としつつ各自の仏教理解を戦わせた思想論争でもあった。

そこで本発表では、縁起説論争を先行研究ではなく研究対象として扱い、木村らの縁起説解釈に見られる人間観に焦点をあわせ分析を行う。その際、木村らも著書中でしばしば言及する三世両重の縁起説解釈との比較対照を視野に入れる。三世両重の縁起説解釈は、縁起支を人間の輪廻転生に配当して初期經典の十二縁起の意味を解釈する説であり、説一切有部、パーリ上座部で採用されるとともに、日本でも伝統的に初期經典の縁起説解釈としての地位を占めていた。つまり三世両重解釈は、仏教の伝統的人間観を代表するものと言えよう。この三世両重解釈と木村らの縁起説解釈を比較することで、近代日本の仏教における人間観の新展開を明らかにしよう。

〈キーワード〉縁起説論争 原始仏教 三世両重解釈